

第一部 分析の批評・批評の分析

1	ヤコブソンとシェイクスピアのソネット 129 番	滝川 睦
2	ヤコブソンの問題点	内藤 亮一
3	構造主義詩学の特質と限界	中川 葉子
4	詩の分析, 詩の生命	中川 一雄

1 ヤコブソンとシェイクスピアのソネット 129 番

滝川 睦

- I 1 Th'expençe of Spirit | in a waste of shame
2 Is lust in action, | and till action, lust
3 Is perjurd, murdrous, | blouddy full of blame,
4 Savage, extreame, rude, | cruel, not to trust,
- II 1 Injoyd no sooner | but dispised straight,
2 Past reason hunted, | and no sooner had
3 Past reason hated, | as a swallowed bayt,
4 On purpose layd | to make | the taker mad.
- III 1 Mad (e) In pursut | and in possession so,
2 Had, having, and in quest, | to have extreame,
3 A blisse in prooffe | and provd | a (nd) very wo,
4 Before a joy proposd | behind | a dreame,
- IV 1 All this the world | well knowes | yet none knowes well
2 To shun the heaven | that leads | men to this hell.

Fig. 1.⁽¹⁾SONNET 129

先ごろ亡くなった言語学者ローマン・ヤコブソン (Roman Jakobson) が *Shakespeare's Verbal Art in 'Th'expençe of Spirit'* (1970) と題する小冊子で展開してみせたソネット 129 番の分析⁽²⁾は、構造主義人類学者レヴィ＝ストロー

ス (Lévi-Strauss) と協力してなされた、ボードレールの詩 “Les Chats” の分析⁽³⁾とともに、構造主義分析の記念碑的存在である。この小論ではヤコブソンのソネット分析の特徴をかいつまんで説明したい。

まずヤコブソンの分析と、それ以前になされたシェイクスピアのソネット研究との相違点を明確にしておかなければならない。批評史を辿っていて、まっ先に気づくのは、ソネット研究という題目でいかに多くの批評家の精力が、ソネットに隠された詩人の私生活を読みこむのに費やされてきたか、ということである。“Mr. W. H.”あるいは“Dark Lady”とは何者かといった、いわば「好事家的関心」に支えられた伝記研究と呼んでもさしつかえなかろう。これと並んで特徴的なのは、テーマの発展に基づいてソネット 154 篇を並びかえ一貫した物語を組み立てようと試みる、ソネットの順序を問題にする研究である。129 番を例にとるなら、オルガンを奏でる婦人を歌った 128 番と、詩人の心を崇拜に駆りたてる婦人の魅力を歌った 130 番との間では、「肉欲」の凄まじさを歌いこんだ 129 番は落ち着きが悪いから後まわしにする、といった類いの研究である。無論これだけでは従来のソネット研究をいいつくしたことにはならないが、ともかく詩人の伝記研究に力点を置いたものにしろ、配列に関する批評⁽⁴⁾にしる、ソネットの中からある要素を引きだしてきて、その作品の外側にある要素と強引に結びつけようとしてきたことは否めない。ヤコブソンはそのような批評に真向から反対する。ヤコブソンの “Les Chats” の分析を紹介している佐々木明氏の言葉を借りるなら、ヤコブソンの分析は「一篇の詩が、他との比較を許さぬ絶対的対象である」ことを確認した上で、「音韻、語の意味、文法、作詩法などの各レベルが積み重ねられた重層的な構造を『縦』に切る⁽⁵⁾」ことでおこなわれる。そして重層的なレベルに存在する各要素の関係に着目して、各レベルの相互関係ならびに詩の全体的構造を明らかにするのである。ソネット 129 番に限っていうなら、「敏感で、先入感を持たない読者なら誰にでも明白な外的、内的な構造」を持っていると但し書きがつけられているのにも注意しておきたい。

では具体的にヤコブソンが記述してみせたソネット 129 番の構造とはいかなるものか。スペースの都合で、それをつぶさに説明している余裕はない。彼の

構造分析の根底に据えられている key ideas だけを紹介しておくことにする。第1の key idea は奇数・偶数の概念である。たとえば奇数行同士、また偶数行同士が韻を踏んでいるなど。第2の key idea は二項対応 (binary correspondence) である。これはヤコブソンが音素 (phonemes) を分類する際に使った二項対立 (binary opposition) の概念をさらに広げたものに他ならない。たとえば二行連 (couplet) では、語頭に /th/ が5個あるのに対して、四行連 (quatrains) ではそれが2個しかないとか、品詞の種類を例にとるなら10個も形容詞が使われている奇数連に対して、偶数連ではわずか1個しか使われていないなど。この二項対応を利用してヤコブソンは以下の4種類に連を分割する。(i) 奇数連と偶数連との二元的対応 (ii) 外側の連 (第一連と第四連) と内側の連 (第二連と第三連) との二元的対応 (iii) 前半の二連と後半の二連との二元的対応 (iv) 四行連と二行連との二元的対応。第3の key idea は詩の中心 (center of the poem) である。ソネット129番の場合、中心 (center) は第二連の三行目と四行目の間 (Fig. 1. では・で示した) に置かれるという。その理由をヤコブソンは次の様に説明する。たとえば休止 (breaths) の位置を調べてみると、詩の中心にいたる前半の求心的な行 (centripetal lines) では middle foot のまん中に置かれる一方で、後半の遠心的な行 (centrifugal lines) では third foot の前か、後ろか、あるいはその両方に置かれるといった具合に、詩の中心を境に、休止の位置が変化しているからである (Fig. 1. 参照)。

ここで、ヤコブソンの構造分析に対していち早く、その問題点を指摘したりリチャーズ (I. A. Richards) の言葉⁶⁾に耳を傾けておく必要がある。リチャーズは最初に、ヤコブソンの記述してみせたソネット129番の重層的な構造が、はたして「敏感で先入観を持たない」読者にとってそれ程明白なものかどうか問いを投げかけることで論を進めていくのだが、ここでは彼の挙げる問題点のうち三つを紹介しておきたい。1. 「詩に対する関心」といったものをヤコブソンの如く項目別に記述する作業にすりかえてしまう危険はないか。2. 「二項対応」あるいは「二項対立」という物差しに合わない詩は評価されないのではないか。一般言語学で用いられた説明を詩に応用する際に詩的なプロセスには本質的でない部分を強調することになりはしないか。3. semantic structure, thematic

structure を明らかにすること、の三点である。

「説明されない美は、私をいらだたせる」と言ったのはエンプソン (William Empson) だが、この言葉はソネット 129 番を分析するヤコブソンに、より一層似つかわしいような気がする。そう言えば *Seven Types of Ambiguity* の初版の序に書かれているように、エンプソンが分析のヒントを得たのが、グレイヴス (R. Graves) らのシェイクスピアのソネット 129 番批評⁽⁷⁾であったことを思い出すなら、「新・批評^{ニュー・クリティシズム}」と構造主義批評との間に因縁めいたものすら感じられるのである。それはともかく、ヤコブソンの分析によって、ソネット 129 番が、ランサム (J. C. Ransom) の言うような「ただの 14 行の詩で、論理的な構造を持たない⁽⁸⁾」のでは決してなく、重層的な構造を持っていることが明らかになったのは事実だ。が、ヤコブソンの分析そのものが、彼がめざした程客観的で科学的だったかという問題になると我々はリチャーズとともに首を傾げざるを得ない。「詩の中心」の設定一つとっても言語学者ヤコブソンの恣意的な操作を否定することはできないからだ。だが逆に、客観的な分析をめざし、結局、分析者の主観性 (subjectivity) を拭い去ることのできなかつた点に、彼の構造分析の欠点などではなく、むしろ文学作品の「したたかさ」を感じるのは筆者のみの偏見ではなからう。

2 ヤコブソンの問題点

内藤 亮一

詩は言語によって表現されているのだから、言語分析を詩に適用することは正当な試みであろう。しかし、それによって言語を詩たらしめているものを究明できるかどうかは、いわゆる詩学をも包括する言語理論を構築できるかということにかかってくる。そしてヤコブソンは言語学が言語を扱う以上は、それを目指さなければならぬと考える。⁽⁹⁾

ソネット分析もそうした言語学者ヤコブソンの姿勢のあらわれと見ることが